

「健康福祉」教育30年と今後

— 特に、体育系大学にある学科としての意義 —

30 years of “health and welfare” education and the future :
Especially its significance as a department in a sports science university

小松 正子¹

Shoko Komatsu

要旨：全国に先駆け開設された「健康福祉」を冠する学科、体育系大学での設置という特徴のある仙台大学体育学部健康福祉学科も30周年を迎えようとしている。これまで、保健体育科、特別支援学校、養護および福祉科の教員や介護福祉士・社会福祉士を多数養成してきた。学科を取り巻く社会の急速な変化を概観すると、健康福祉の実現には、スポーツや読書などの力も用い、社会的孤立度等を改善できる人材を育成することがますます重要となっていると感じた。

キーワード：健康福祉、体育系大学、スポーツ、保健体育科教諭、特別支援学校教諭、養護教諭
Health and Welfare, Sports Science University, Health and Physical Education Teacher,
Sports, Special Needs Education Schools Teacher, Nursing Teacher

I. はじめに

仙台大学体育学部健康福祉学科（以下、当学科）は、1995年4月に開設され、30周年が間近である。「健康福祉」を冠する学科として草分け的で、体育学部にある健康福祉学科ということも斬新であった。教員免許は学生（現在、定員100名）の約半数が取得し、介護福祉士などの福祉系人材も多数養成してきた。この節目に、当学科の成り立ちや現況を振り返り、また、学科を取り巻く社会の変化等を概観することで、大学の健康福祉学科としての今後のあり方を考察することとした。

II. 方法

1. 資料・文献等の収集・選定

「健康福祉」をキーワードに、記事検索や、図書・文献検索等による書籍・論文の収集・検討を行った。その中から「健康福祉」の語句の定義や学問領域との関連について記述のあるものをいくつか抽出した。当学科がこれまで発行した記念誌、研究会（健康福祉研究会）報告集なども参照した。

学科を取り巻く社会の変化についての資料としては、社会保障、まちづくり、近未来の持続可能性等に関する広井良典氏（京都大学人と社会の未来研究院教授、専門は公共政策・科学哲学）の著作から、比較的最近発行のもの、健康福祉領域に関連のあるものを中心に参照した。

また、「歴史を広範な側面から研究することによる近未来予測」で、一定程度の評価があるジャック・アタリ氏の著作から最近のもの、教育に関連のあるものも検討した。

¹仙台大学体育学部 教授

2. 資料の検討

資料を用いて、学科の成り立ち・現況の振り返り、「健康福祉」「健康福祉学」という語句の定義、当学科を取り巻く社会等の変化、近未来の予測などをふまえつつ、当学科の今後のあり方などを考察した。この際、当学科が体育系大学に設置されていることより、特に、スポーツとの関連は意識的に検討した。

また、この過程で、当学科学生からも感想・意見等を聴取し、参考にした。対象の学生は、著者の卒業論文指導学生3名（4年生、うち保健体育科教諭免許取得予定2名）と、「健康福祉について考えたい」との希望があった3年生1名（介護福祉士および保健体育科教諭免許取得予定）の計4名（男子2名、女子2名）である。4年生は、卒業論文ゼミナールの一環として計6回（2024年5～7月）、「健康福祉」に関する学習（参考文献から、広井、前橋、アタリを中心に抜粋した資料の抄読など）を行った後に感想・意見を聴取した。3年生は、資料・関連論文の共有の後に、メールにて意見を聴取した（1回、同年5月）。（仙台大学倫理審査会承認：No. 2024-04）

Ⅲ. 結果および考察

検討結果に、若干の考察等を加えながら述べる。

1. 当学科の成り立ち、理念、現況など

（1）平成6（1994）年当学科開設申請

昭和40年頃の文部省通知で、大学学部の標準的な学科構成について示唆されており、体育学部については、体育学科と健康学科の2学科構成とされていた。仙台大学は体育学科単科であったが、その後の情勢・大学設置審議会の方針等も踏まえ、健康福祉学科の増設申請をすることとなった（朴澤，2005）。

「設置の趣旨と理由」は、「人々の健康的な生活への自立と生活の質を向上させ、生きることの喜びを実感できるような健康的な社会づくりに役立つ健康と福祉の有機的統合をめざす新しい教育分野として、体育学部に健康福祉学科を新しく設置することとした」（当時の糸野豊学長が起草した文章）。その頃は、「健康福祉」という用語がほとんど定着しておらず、インターネット上で、専門学校の学科名称として一つあったかもしれないという状況だった。行政当局からは、「理解しにくいので、“健康・福祉学科”としたらどうか」と指導いただいたが、新しい教育分野であるからこそ「健康福祉」と名付けたいと説明し理解を得た（朴澤，2005・2016）。

（2）大学の理念、免許・資格取得状況など

仙台大学の基本理念は「創意工夫と先見性をもって実学を志し、実学に根ざした人格形成と人材育成を図る」である。当学科は「身体活動を通して、全ての人の健康福祉をサポートできる人材育成」をめざしている。取得可能な国家資格（受験資格）・教員免許としては、介護福祉士、社会福祉士、特別支援学校教諭（基礎免許は保健体育科）、保健体育科教諭、養護教諭、福祉科教諭がある。

直近の2023（令和5）年度および2022（令和4）年度の教員免許取得者数および学校入職者数を表に示す。複数免許取得者を考慮すると（保健体育科の中・高の同時取得、特別支援学校教諭の基礎免許が保健体育科教諭であることなど）、各年度約50名～それ以上が教員免許を取得している（約半数）。学校入職者数は、30名前後であるので、卒業生の約3割となる。また、2022・2023年度の福祉系資格取得者は平均で介護福祉士約23名、社会福祉士受験資格約9名である。福祉系の入職者数（入職時は介護福祉士が殆ど）は、平均約18名である。

表 仙台大学体育学部健康福祉学科の教員免許取得状況

免許種	2022 (令和4)年度	2023 (令和5)年度
保健体育科教諭 (中学校)	43	36
保健体育科教諭 (高等学校)	44	37
特別支援学校教諭	26	20
養護教諭	13	13
学校入職者数	32 ^{*1}	29 ^{*2}
(卒業者数)	100	100

注) 人数は、一括申請分. 10名以上
 取得した免許種のみ

※1 小学校6名、中学校8名、
 小中一貫1名、高校4名、
 特別支援学校13名

※2 小学校6名、中学校6名、
 高校5名、特別支援学校12名

そのほかにも、健康運動、レクリエーション、障がい者スポーツ関連等、多数の資格が取得可能である。地域の健康づくり活動（企業を含む）や、ボランティア活動（東日本大震災時の運動指導等を含む）にも熱心に取り組み、大学独自の「健康づくり運動サポーター」資格も学生に認定している。また、市民公開講座も定期的に行っている。

2. 「健康福祉」という語句について

記事検索（ジャパンナレッジ）で「健康福祉」を検索すると、全国健康福祉祭（愛称：ねんりんピック）や、健康福祉を名称に含む医療機関、教育機関など数件が表示された。全国健康福祉祭は、「高齢者が主役のスポーツ・文化の祭典」で、その“目的・沿革”は、「スポーツや文化種目の交流大会を始め、健康や福祉に関する多彩なイベントを通じ、高齢者を中心とする国民の健康保持・増進、社会参加、生きがいの高揚を図り、ふれあいと活力ある長寿社会の形成に寄与するため、厚生省創立50周年に当たる昭和63（1988）年から毎年開催されている」（厚生労働省ウェブサイト）。シンボルマークの説明には、「古いも若きも仲よく、ともに生きていく社会をふたりの人物で表しています。また、2つの円は、その組み合わせにより、お互いに助け合い、健康と福祉の輪が未来に向かって広がっていくことを意味しています。」とある。

「健康福祉」という語句は、高齢者領域で使われ始めていたが、高等教育分野では当学科が「健康福祉学」として認可を受けて学士教育を開始したと考えられる。

3. 「健康福祉学」の定義など

「健康福祉学」の定義もいくつかなされている。前橋（2008）は“・・・誰もが心身ともに健康で、いきいきと生きることのできる健康的な暮らしのあり方（幸福）を考え、そのために健康科学の研究知見や実践経験を最大限に生かして、社会の方策までも生み出す。そして、積極的で、かつ、前向きな社会的努力をも模索していこうとする学問が「健康福祉学」であり、健康福祉のめざすところでもある”としている。

また、中島は、「『健康福祉』人間科学」（2008）のなかで、“人間という存在は多面性を有し、「生物的」「心理的」「社会的」「倫理的」などの側面をもつ。「健康」や「幸せ」は、これらの多面性が「よき均衡」を保つことにより支えられている。現代の社会は、人類がかつて経験したことの無い速さと規模と深刻さをもつて、変化しつづけている。このような状況に

適応し生存を図る「人間」にとって、「健康」で「幸せ」を保証するためには、これまでのような単独分野としての医学 / 保健学 / 看護学 / 社会福祉学などのいずれか（もしくはこれらのうちのいくつか）からのみのアプローチでは十分ではない。いま、強く望まれるのは、これらすべてを包括するような、「人間」の「健康」と「幸せ」を追求する「総合学」としての未来志向型「人間科学」である”旨、述べている。

この「人間科学」については、当学科も、開設当初の教育内容の2つの柱のうち1つが「人間学」であった（他の1つは「スポーツ科学科目」）。朴澤（2005）は、“人間（ホモ・サピエンス）について「体育」（体を育む）と「福祉」を「健康福祉」を軸に結合する際、基本的な素養として必要となる知識を付与する科目として「人間学」を位置づけた。「人間学Ⅰ（1年次科目）」は、人間を人文・社会科学的視点から捉え、「人間学Ⅱ（2年次科目）」は、自然科学的視点から捉える科目とした”としている。

なお、現在は、「人間学」にかわり、「健康福祉総論」（1年次科目）で、学科教員が各自の専門と健康福祉について、例えば「健康福祉と教育」という形で話している。各講義録は編纂し、教員間で共有をはかっている（近年は、クラスルームで共有）。

4. 30年間での社会・環境の変化など

前項までで、当学科の成り立ち・経過、「健康福祉」にかかわることがらを概観してきたが、学科開設から30年が経過し、当学科を取り巻く状況も大きく変化している。学校教育においても、社会情勢を背景に変遷がみられているようである（白幡ら、2024）。そこで、当学科の今後を考える際の参考に、社会の変化などの概観を試みた。これは広汎で分野横断的なことがらで、本稿では、広井の思索・分析等を手がかりに、海外の資料も若干加え、検討した。

（1）経済・財政（日本の債務残高ないし借金）など

1990年代後半頃（ほぼ当学科開設時）は、日本の借金はすでに相当の規模になっていたが、先進諸国の中ではイタリアなどの方が多かった。今（約30年後）は、1000兆円あるいはGDP（国内総生産）の約2倍という、国際的に見ても際だって大きな規模に及んでいる。

そして、この借金の累積には、次にふれるように、「古い共同体が崩れ社会が個人化し、他人への無関心や、他者との支え合いへの忌避感があることがつながっている」としている（広井、2019）。

（2）「シャッター通り」「耕作放棄地」の問題

「シャッター通り」（地方都市の空洞化）と「耕作放棄地」（農山村）は戦後日本社会が生み出した“双子の問題”とも言える。以下の2つのステップがあったといえる。

① 第1ステップ：いわゆる高度成長期（1950～70年代頃）

「農村から都市への人口大移動」の時期で、地方都市もかなりの賑わいを保っていた。

② 第2ステップ：1980～90年代頃

「アメリカ・モデル」と呼べる「郊外ショッピング・モール型」に向かう流通・経済政策と道路・交通政策がとられた。これは、地方中小都市中心部で「シャッター通り」化が進むこととなった（人口20万程度以下の地方都市では、ほぼ間違いなく。時に30～50万の都市でも）。また、車を持たない高齢者の買い物難民などの問題にもつながっている。

一方、ヨーロッパの都市では、人口2万人の町でも自動車規制などにより、中心部にコミュニティ空間と呼べる「歩いて楽しめるまち」の例がある。

さらに現在、アメリカではネット通販などが急速に普及した影響から、巨大ショッピング・モールの閉鎖が目立つようになっている。これは、中心市街地の商店街などの価値の再発見につながる。ただし、商店の後継者や、消費者にとっての魅力などの問題もある（広井，2023・2024）。

（3）社会的孤立、「つなぐこと」など

現在の日本社会は「古い共同体が崩れて、それに代わる新しいコミュニティができていない」という状況にあり、社会的孤立度（家族などの集団を超えたつながりや交流がどのくらいあるか）が先進諸国の中で高い。

都市化や産業化が進み、それまで家族や共同体の中で行われていた「経済的扶養」や「介護」が「外部化」していった。社会保障というシステムは、介護にしても年金にしても“家族を超えた支え合い”の仕組みであるが、家族以外の他人への無関心は、そうした支え合いへの忌避感につながる。

一方で、社会がそのように個人化していくと、たとえば「自分とはまったくゆかりのない震災地域の救援活動のボランティアに参加する」といった関わりがある。

人間をめぐる基本構造は図 1 のようにまとめることができる。現代社会における個人は、土台にあるコミュニティや自然から切り離されがちで、そうしたものとの「つながり」を何らかの形で回復する必要がある。「自然 / 生命 / 身体」など図の下方へ向かう技法にはヨガや気功も含まれ、マインドフルネスも関連すると思われる（広井，2005・2019）。

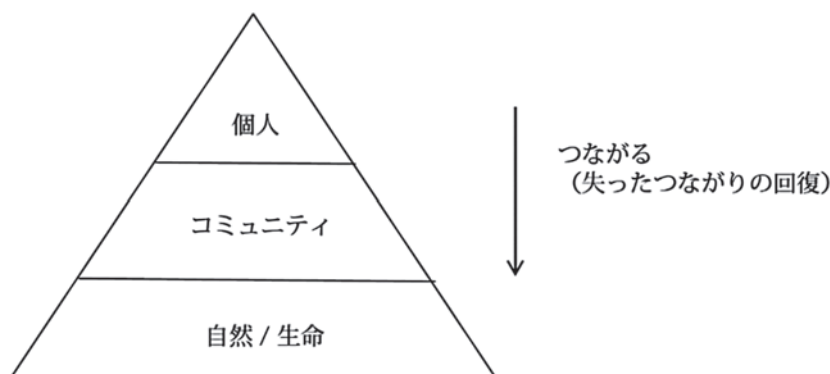


図 1 人間をめぐる基本構造
[広井良典の（社会保障論；2005，商店街の復権；2024）を一部改変]

ヨガに関しては、当学科でも、「健康支援・介護予防演習」（2年次科目）において、当学科卒業生の講師等の指導により学び、好評を博している（小松，2021）。マインドフルネスについても、これまで相当数の卒業論文で身体との関連の検討などがなされている。

（4）海外の近未来予測より

ジャック・アタリ氏の著作で特に、印象的だった内容を以下に示す。

① 「命の経済」の発展

氏は、将来世代の役に立つ生産活動、とくに温室効果ガスの排出量の少ない生産活動を「命の経済」と呼ぶ。そして、例として挙げられているものに、予防、医療、スポーツ、公衆衛生、教育、持続可能な移動手段等々がある。また、いくつかの条件付きながら、日本が「命の経済」への転換の先導国になると確信していると述べている（アタリ，2023）。

② 読書、スポーツについて

著書「教育の超・人類史」(アタリ, 2024)のなかで氏は、教育におけるデジタル化について、「ほとんどの国では、生徒がコンピューターを利用するのは、学校よりも家庭においてであり、学校の勉強よりもゲームのためだ(ビデオゲームに費やす時間は、2022年には、1日2.5時間になった)」と警鐘をならす。そして、「読者に向けた20の具体的な提言」で、読書とスポーツについて、以下、述べている。

- # 1 ひたすら読書する。自分の興味のあることが見つかるまで、あらゆるジャンルの本を手にとってみる。
- # 9 学業における失敗を取り返しのつかないことだと受け止めてはいけない。わからないことは書き留めておき、独りで、あるいは他者とそれを理解するための手段を協力して見出す。こうした作業を身に付けるには、スポーツは格好の修行の場だ。

スポーツについては、同書の「今後教えるべき新たな四学科」の項においても、「……これらの側面を発展させるのに不可欠なのは、できるだけ多くの個人および集団のスポーツに熱心に取り組むことだ」としている。

ビデオゲームやネットだけに没頭することなく、スポーツや読書にも若者が親しめるように工夫することが、以前にもまして重要となっていると感じた。昨今、教員の長時間勤務解消などで、「運動部活動の地域移行」が進められている(スポーツ庁, 2022)。この取組みも円滑に進むことが望まれる。仙台大学も、数か所の自治体と連携して、数種目のスポーツで、学生とともに地域スポーツ教室を開催するなど、積極的にかかわっている。

なお、こどものスポーツの選択肢として、体操教室、陸上教室などの習い事もあり、社会で役割を果たしている。

関連することとして、村中は、「子どもを取り巻く現状と課題」(2008)のなかで、以下のように述べている。“今の子どもは人間関係が複雑化している。かつての時代の子どもの行動範囲は、学校と家庭で、人間関係はシンプルで、連続し安定していた。今は、学校に加えて塾やお稽古事での友達や、インターネットを通しての顔も見ることがないような人間とのつながりをもっている子どもも少なくない。水泳や体操などの教室に行けば、絶えず進級テストが行われ、進級すると上級での仲間作りがある。サッカー、野球等のクラブに所属すれば、技量の上達はもとより、チームワークを求められる。ほとんどの子どもたちは明るく屈託がないので、子どものしんどさに気づいている大人は案外少なく「心身を鍛えるよい機会」、「塾に行けば友達ができて楽しいだろう」等、そうすることが子どもをストレスから解放する手段になっているという解釈をしている場合が少なくない。”

こういった子どものストレスにも注意しながら、スポーツが子どもの人格形成に役立ち健康福祉的な社会に結びつくように、地域に合った選択肢があることが必要と思われた。

5. 学生の意見・感想

学生と資料を「抄読」「読み合わせ」等により共有した後に聴取した意見・感想を、原文を生かしつつ以下にまとめる。

《健康福祉学、健康福祉学科について》

- 健康福祉は、これからの高齢社会において地域や社会全体の将来を担う人材の育成をはか

る重宝されるべき学問である。「健康福祉」については、学科に所属している我々で、人々の健康保持増進を支えていく人材であるという意識を持つことが必要と感じた。これからの日本にとって健康福祉がすべきことやあるべき姿を考えていきたい、そういったことを学ぶ機会が増えるといい。

- 保健体育科と特別支援学校の教員免許を取得しようと勉学に励む者、介護福祉士や社会福祉士の国家資格をめざし日々励む者・・・この学科の一人ひとりに健康福祉の意思が根付いているのではないか。障がいや福祉について関心があり、介護制度、障がい、医療についての理解が高いと思われる。誰もがみな平等とし、手を差し伸べることが多く、他を理解し受け止める人も多い。
- 多様化していく世の中で、いったい誰がそれを受けとめ、活動を広めるだろうか。昔の価値観は今では失われているかもしれないが、それで諦めるのではなく、受け流し、明るく笑顔あふれるあたたかい人がいるのがこの学科である。健康福祉という名称があり良かった。強い意志を持ち、考えをチームで出し、皆に広めていくことができる。
- 個人、コミュニティ、自然・生命の配分が崩れるとどんなものになるだろうか。配分が良く枠に収まるのも多いが、はみ出すものもあると思う。それでも柔軟に接し、会話することで、協力できる人が当学科には多くいると思う。

《街づくりと健康福祉など》

- コミュニティ / まちづくりが印象的で、とても重要だと思った。今後、卒業論文等でも、こういったことをさらに考えていきたい。
- 体育系大学で健康福祉について学ぶことで、スポーツ・体育と健康福祉を関連づけることができる。スポーツ・体育のもつ、コミュニケーション能力やコミュニティ形成力などが、シャッター通りや空間作りなどの課題解決に活かせると感じた。また、街づくりには、住民と学校の連携も役立つのではないか。
- 地域や社会全体の未来を担う人材育成という点で、街づくりにおける地域住民と学校の連携が重要になってくるのではないかという学生の意見に賛成だ。地域からの教育支援や、放課後活動において学び合う機会を設けたり、学生が地域住民との関わりを持ちながら実践的に健康福祉のサポートについて学べる機会を地域からも学校からも提供できるような体制づくりについて明確にしていくことが求められるのかなと思った。

《コミュニケーションとスポーツ、スポーツ関連科目について》

- スポーツの科目、例えば球技では、全学科の学生と、初対面ながら、チームを組み、レフリーなども置き対戦するので、コミュニケーション能力を養えている実感がある。
- スポーツも行き過ぎは弊害があるので（特に、低年齢）、「文武両道」が良いのではないか。
- レクリエーション実技などの科目も、レクリエーションを指導する側になったり、話したことの無い人とペアになったりで、コミュニケーション能力向上に役立った。他学科の学生から、レクリエーションの技術のレベルが高いことも指摘される。

《その他》

- 命の経済を発展させていくために健康福祉学科としても何か貢献できる部分があるのか、考えていきたいと思った。
- 他学科とかかわることは良いと思う。教育実習でも、他教科の先生の授業も大変参考になった。

このように、学生も「健康福祉」の社会的意義に関心を示し、学ぶ意欲も大いに感じられた。当学科としても、こういった意見・希望を真摯に受け止めてゆきたい。

IV. 今後についての方策など

これまでの検討を踏まえ、今後、当学科の「健康福祉」教育をより充実させるために考えたことを3点述べる。

1. 「人間をめぐる基本構造」と健康福祉学科の役割の図式化

当学科と現代社会の関わりを図1をもとに、整理した(図2)。「身体活動等を通して、全ての人の健康福祉をサポートできる人材の育成・供給」をめざしている。そのために、健康運動・スポーツ、コミュニケーションやレクリエーション関連科目を通して、「個人・コミュニティ・自然/生命」のつながりを強めるような学びや、地域での健康づくり支援、ボランティア活動等での実践を行う。社会的孤立度が増していることなどを踏まえ、こういった意識を共有する。



図2 仙台大学体育学部健康福祉学科の教育・活動と現代社会
[広井良典の「人間をめぐる基本構造」をもとに独自に改変を加えた]

2. 読書について

アタリ氏は、若者のゲームにさく時間の増大を憂慮していた。若者の活字離れが指摘されるが、筆者の経験からすると、学生は「読み聞かせ」への理解・反応は非常に良いといえる。例をあげると、教養系授業で、当学科の所在する宮城県柴田町ゆかりの「樅の木は残った(山本周五郎著)」の冒頭部分などを読み上げると、ほぼ全員が、こちらの感じてほしかった面白さなどをレポートに記す(「涙が出そうになった」などもある)。

ただし、「読み合わせ」(学生に順番に読んでもらう)には、拒否感を持つ場合もある。また、題材によっては、学生の反応に濃淡があるものもある。そこで、学生が読書から学ぶ機会を増やす試みを平準化して行うために、いくつか題材を厳選し、教員がそこから自分の合ったものを選び、読み聞かせる等も有用ではないだろうか。仙台大学には、教員が学生にすすめる本を紹介した文章の蓄積もある(仙台大学附属図書館ブログ、書燈)。

その候補として考えられる本に、ラグビー指導者のエディー・ジョーンズ氏(体育教師としての勤務経験もある)が「人生について」を考える参考書として推薦する「モリー先生との火曜日」(アルバム, 1998)がある(生島, 2015)。これは、人気のスポーツライターの著者がある日テレビで、大学時代の恩師モリー(社会学教授)が難病のALS(筋萎縮性側索硬化症)を病い死期が近いことを知り、大学時代と同じように毎週「火曜日」に恩師のもとに通うことで、「人生の意味」をテーマに“最終講義”が行われた実話だ。同氏の推薦の言葉は、「人生がどれほど貴重なものかを考えさせられる。自分の考えをしっかりと持って歩んでいくことが大切と

書かれている。また、他人のためにも時間を費やすことの大切さが書かれてある。人生のエッセンスだと思う」だ。この本で印象的だった話を二つ、かいつまんで紹介する。

- ① モリーが聞いた小ばなし：小さな波が海の中で楽しい時を過ごしていたが、やがてほかの波たちが次々に岸に砕けるのに気づいた。そこへもう一つの波がやってきて、暗い顔をしている最初の波に「何が悲しいんだ？」とたずねる。最初の波は「わかっちゃいないね。ぼくたち波はみんな砕けちゃうんだぜ！ああ、おそろしい」。すると二番目の波が「わかっちゃいないのは、おまえだよ。おまえは波なんかじゃない、海の一部なんだよ」。(第十三の火曜日－申し分のない一日より)

これは、介護福祉士をめざす学生など高齢者と接する機会の多い学生には、特に、参考になると思われる。しかし、その学生に限らず、「死への漠然とした恐れ」は世代を問わずあると思うので、若い頃から死について考えておくことは、その後の人生に有用と思われる。

- ② 1979年（モリーが教鞭をとっていた頃）、大学の体育館でバスケットボールの試合があった。チームは好調で、学生が「おれたちナンバー・ワン！ナンバー・ワン！」そばに座っていたモリーは首をかしげている。とうとう「ナンバー・ワン！」のまっ最中に、立ち上がって大声をあげる。「ナンバー・ツーじゃいけないのか？」学生はあっけにとられ応援はやみ、モリーは誇らしげな微笑を浮かべて腰をおろした。(第十一の火曜日－今日の文化より)

これも、さまざまな意見があることや、それを表明する人がいることがわかり、体育系大学に限らず学生が自分の考えを深めていくうえで役立つと思われる。

3. 学科間の意見交換、学外との交流など

仙台大学は現在、6学科構成で（当学科のほかに、体育、スポーツ栄養、スポーツ情報マスメディア、現代武道、子ども運動教育）守備範囲は多岐にわたっている。「健康福祉」教育を検討する際も、学科内だけではなくさまざまな専門家から意見を聞くことで、広がりが出ると思う。

そのほか、例えば、公開講座についても、単に参加者の「自身の心身の健康のため」ではなく、社会について考えるような内容をより多くするのも有意義といえる。例えばだが、社会的孤立状態（高齢者を含む）と犯罪の関連を知ること、「自分とも無関係ではない」「それだけは良くない、避けたい」という意識が広まり、より多くの人の健康福祉的行動につながる可能性もある。前橋（2008）も、“健康福祉の教育実践は、児童生徒を中心とする学校教育の場面にだけ展開されるものではなく、青年・婦人・高齢者などの成人層においても実践される必要性和要望が高まっている。大人が率先して、ちょっとした工夫をして人が助かる行動をすることが良い社会につながる”旨述べている。広井も、“日本という社会は、高齢化、人口減少における世界の「フロントランナー」であるので、従来よりもひと回り大きな視野に立って、・・・日本社会の持続可能性について議論をおこなって”（広井，2019）と述べている。“日本の商店街の多くが、ヨーロッパと対比して衰退の道をたどったのは、個々の商店の経営や利益という発想が中心で、それを超えた「コミュニティ」や公共空間づくり、持続可能性といったことへの意識が薄いことに要因の一つがある”（広井，2024）とのことだ。

今回検討したことも念頭に、さまざまな機会をとらえて、「健康福祉」教育を強化してゆきたい。

文献

- 生島 淳 (2015). エディー・ジョーンズとの対話 コーチングとは「信じること」. 文藝春秋厚生労働省. 全国健康福祉祭 (ねんりんピック): 全国健康福祉祭 (ねんりんピック) の概要. <https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/nenrin/gaiyo.html> (2024年8月参照)
- 小松正子・中村孝子・星勝久・高橋亮・笠原岳人・高崎義輝・橋本実 (2021). 体育・健康系大学でのヨガおよびノルディックウォーキングの体験授業と学生の学び. 仙台大学紀要52 (2): 49-54
- ジャック・アタリ (2023). 世界の取扱説明書 (訳: 林昌弘). プレジデント
- ジャック・アタリ (2024). 教育の超・人類史 (訳: 林昌弘). 大和書房
- 白幡真紀・伊藤愛莉 (2024). カリキュラムにおける「資質・能力」の日英比較 -導入過程の議論に焦点を当てて-. 仙台大学教職支援センタージャーナル1: 33-44.
- スポーツ庁 (2022) 学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドラインについて. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/1405720_00002.htm
- 仙台大学附属図書館ブログ 書燈. <https://shotoh.blogspot.com/>
- 中島義明・木村一郎編 (2008). 「健康福祉」人間科学. 朝倉書店.
- 広井良典・山崎泰彦編著 (2005). 社会保障論. ミネルヴァ書房
- 広井良典 (2019). 人口減少社会のデザイン. 東洋経済新報社
- 広井良典 (2023). 認知症にやさしい健康まちづくりガイドブック. 地域共生社会に向けた15の視点 (今中雄一編著). 学芸出版社
- 広井良典編 (2024). 商店街の復権 歩いて楽しめるコミュニティ空間. 筑摩書房.
- 朴澤泰治 (2005). 健康福祉学科の創設と運営 (回顧と展望). 健康福祉学科10周年記念誌. p.3-11. 仙台大学体育学部.
- 朴澤泰治 (2016). 健康福祉学科の20年. 健康福祉学科20周年記念誌. p.6-11 仙台大学
- 前橋明編著 (2008). 健康福祉学概論 健やかでいきいきとした暮らしづくり. 朝倉書店
- ミッチ・アルボム (1998). モリー先生との火曜日 (訳: 別宮貞徳). NHK出版
- 村中由紀子 (2008). 子どもを取り巻く現状と課題. [前橋明編著: 健康福祉概論. 第4章 親と子の健康福祉. 朝倉書店]
- 渡邊勝之・広井良典編著 (2019). 医学・看護・福祉原論いのちに基づいた医療&健康. ビイグ・ネット・プレス

謝辞

本稿を終えるにあたり、種々のご協力をいただいた教職員、学生の皆様に深謝いたします。また、原稿作成にあたりご協力いただいた、堀江竜弥健康福祉学科長、後藤満枝准教授、福田伸雄准教授に厚く御礼申し上げます。